View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

東洋大学学術情報リポジトリ　Toyo University Repository for Academic Resources

大正歌壇における芥川龍之介の短歌・歌論―大正四年から大正十二年―

著者	清水 麻利子
雑誌名	日本文学文化
号	13
ページ	93-109
発行年	2014-02-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006403/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

大正歌壇における芥川龍之介の短歌・歌論

―大正四年から大正十二年―

清水麻利子

歌作ばかりでなく、近代短歌の批評にも筆を執った、大正四年から大正十二年の芥川の短歌を読み解き、短歌によって涵養したものがあるとすれば、それがどのように小説に活かされていったのかを考察したい。また、芥川の短歌・歌論を通して、多様な内容と表現を持つ現代短歌に繋がっていく、大正歌壇について考察をする。

一、芥川龍之介の短歌の変容

芥川龍之介の短歌の歌数は大正二年から五年が多く、中でも大正四年・五年は、吉田弥生との失恋の厭世的な心情を託している。その後は新進作家としての活躍のため多忙となり、中国旅行前後の大正九年・十年に二回目のピークがある。それからは極端に少なくなり、今様体や現代詩、俳句が残されている。公表歌は多くはない。書簡を中心に、〈家〉の問題での苦悩や様々な葛藤など、人間味豊かな短歌を詠む。

※『芥川龍之介全集』岩波書店一九七八年四月（作品引用はこれに拠る。）
「　」〈　〉は引用。（　）と傍線は発表者が付す。

二、新進作家としての出発と、片山廣子『翡翠』の批評（大正四年から大正五年）

大正四年十一月「羅生門」を『帝国文学』に発表。大正五年二月、第四次『新思潮』創刊号に「鼻」を発表。漱石の賞賛を受けた。七月、東京帝国大学英文学科卒業。卒業論文は「ウイリアム・モリス研究」。続けて「芋粥」「手巾」を書き、新進作家としての出発を果たす。十二月、海軍機関学校の嘱託教官の職を得て鎌倉に下宿する。夏目漱石死去。大正三年までの短歌は、北原白秋、吉井勇の模倣のようなものが多か

ったが、斎藤茂吉の影響が次第に現われてくる。

佐佐木幸綱「詩歌」『芥川龍之介研究』（八二三頁）[1]には、

芥川の詩歌の実作は、まず短歌から入った。そして旋頭歌、俳句、今様へと古典的な詩形を次々と体験してゆき、やがて口語自由詩の中に形式的完成を求める、という困難に向かって行っている。この過程で北原白秋、吉井勇、斎藤茂吉、夏目漱石、高浜虚子、飯田蛇笏、佐藤春夫、室生犀星、萩原朔太郎らから実に柔軟にその栄養を吸収しているのは周知のところである。さすがによく読んでいる。

とあり、芥川の短歌を三種に分類してある。「一は贈答を中心とする機会詩的なもの。二は、一定のテーマ、素材によってまとめられたいわばストーリーのあるもの、三、その他である。」一は、「文人趣味が露骨で」「高く評価することはできない。」（末の世のくどきの歌の歌ひじり吉井勇に酒たてまつる）　三は、「独自の世界を打ち出し得ているものがある。（わが前を歩める犬のふぐり赤しつめたからむとふと思ひたり）が、やはり、完成度の高いものは、二と見るのが妥当であろう。」そして、世評の高い旋頭歌「越びと」二五首や、今様体の詩「相聞」や「夏」。また、「日常をはなれたそこには、時代の退廃と生きる孤独、そして批評的な目がある」として、「河郎の歌」七首をあげている。芥川の短歌の全体像が見えてくる。

大正四年頃

烏羽玉の夜　（二十首中の七首）

烏羽玉の夜空の下に　ひそひそと　せぐゝまりつゝ行く男あり

夜のほどろ　盗みもせなくひそひそと　爪をかみつゝ、わが行けるはや

夜をひとりさびしく歩むわが姿呆(うつ)けたればか女笑へる

小ざかしく巻煙艸吸ふ唇のうすくつめたくゆがみけるあはれ

薄唇醜かれどもしかれどもしのびしのびに口觸(ふ)りにけり

若人は樓に上りぬ高麗船をのぞむがごとく君をのぞむと

大正四年頃

ほのぼのと赤らひく頬にさゆらげるまつげのかげのわすれかねつも

ひとりゆく韮畑(かみらばたけ)の夕あかり韮(かみら)かなしも吾(あ)がひとりゆく

翠鳥(そにどり)の青き帶していそいそと市路(いちぢ)をゆくがつねなりし人

わが宿の翁の云ひける　二首

さばかりにものなおもひそまらうどよ夾竹桃のさきにけ

らずや

戀はげに病の如し年ふれば癒ゆるならひぞなうれひそね

山陰松江から

この和布香にきくらくは八雲たつ出雲の海のあかつきの音

香を高みこれの和布はわが庵に大わだつ海の霧呼ばんとす

大正四年、五年頃

海がひの流人の墓に月見草黄にさきのこり晝の月さす

ゆるやかにのぼるこゝあのゆげよりもゆくゑさだめずなびくわがこひ

奥野政元『芥川龍之介論』（一〇五・一〇八頁）[2]において、連作「烏羽玉の夜空」の詞書（……一切を忘れしむるものは時なり　されど　その時を待つ能はざるをいかに　われは忘却を感能に求め　感能はわれに悲哀を與へたり）を、吉田弥生との失恋やその後の吉原通いの遊蕩を念頭に、次のように述べられている。

彼の求婚の行為は、社会的通念や倫理に抵触してくるものを含む、いわばエゴイズムの主張にも見合うようなものである。それだけに葛藤はより激しいものであったと思われるが、しかもそれを自覚して推し進めるに力強くあらしめたのは、茂吉的生命感覚に貫かれた「いのち」の発動という契機でもあったと思われる。（略）「羅生門」のテーマとそれらがかかわるのはいうまでもない。

関口安義は『芥川龍之介の歴史認識』（七八～八二頁）[3]に記す。

龍之介は〈家〉の束縛をやりきれなく思う。「周囲は醜い　自己も醜い」（井川恭宛て大正四年三月九日付）という龍之介の言葉からは、単に自分の立場ばかり考えているのでなく、事件を客観的に把握している様がうかがえる。（中略）「烏羽玉の夜空の下にひそひそと　せぐゝまりつゝ行く男あり」にはじまる歌は、官能に慰めを求めた芥川の吉原遊郭行きの折に生まれたものであった。（中略）吉原での遊びは、芥川龍之介の養家に対する実生活上の反逆行為であった。それが一時の空しい行為でしかないことを悟った彼は、ここに束縛からの解放を求めて、虚構の世界に雄飛する。一九一五年秋、九月、松江から戻った芥川龍之介は、一気に一つの小説を書く。それは同年十一月号の『帝国文学』に載った。「羅生門」の登場である。

「烏羽玉の夜」を読むと、失恋の心の虚ろを埋めるのは吉原の女たちではなかったことが分かる。「小ざかしく」「醜かれども」と思うばかりか、さらに自分をあざ笑うようにさえ感じられる。身を堕とした不幸な境涯の女に心を寄せるわけではない。吉原での遊びは心を荒涼とさせるもので、「ゆくゑさだめずなびく」恋心に、弥生の面影も消えない。迷える青年は、創作によって「いのち」を再び吹き込まれる。

〈茂吉的生命感覚に貫かれた「いのち」の発動という契機〉と、奥野氏は『赤光』との運命的な出会いを示す。関口氏は〈束縛からの解放を求めて、虚構の世界に雄飛する〉と捉えている。しかし、作家としての芥川の生涯を思うと、身を削るような創作の呪縛に、新たに捉えられたとも言えるであろう。

山崎甲一『芥川龍之介の言語空間』—君看雙眼色（九六・九七頁）では、「鼻」の禅智内供が抱えるのは、芥川自身の問題であったと語られる。

内供自身の「心もち」の変化は、前後の類似の言葉の対照によって際立っている。「心もち」の変化は、間違っても負の変化ではない。厄介な宿命的な問題から逃避する消極的な人生態度が、結局、危機的な状況を自分に招くだけで、何ら事態の進展には結びついてはいかない。それなら、厄介な問題とまずしっかり向き合うことの大事を覚悟した「心」の変化であった。作者は内供を通して、徹底して迷いながらも、その迷いの果てにふと訪れた一つの曙光を描いた。内供の混乱も解脱も、作者自身の切実な実際問題であったであろう。

「いのち」の声に耳を傾け、束縛から雄飛しようとする覚悟が、創作へと向かわせたのである。山崎氏の指摘のように、〈厄介な問題とまずしっかり向き合うこと〉で、内面の吐露から客観視する姿勢へと変化してゆく過程を、短歌から読み取ることができる。

「烏羽玉の夜」の、「ひそひそとせぐゝまりつゝ行く男」「わが姿呆けたれば」「韮畑の夕あかり」に行くのは、「吾がひとりゆく」覚悟の者である。その先に〈ふと訪れた一つの曙光〉は、傷心の龍之介を、友人の井川恭が故郷の松江への旅に誘い、〈八雲たつ出雲の海〉で感じた〈あかつきの音〉と光に象徴される。芥川が生涯にわたり短歌を詠み続けたのは、短歌が内面を吐露する主観的抒情の文芸でありながらも、客観視する姿勢によって、より高い襟度を持ち得ている点があるだろう。「客観写生」を説く高浜虚子から俳句の指導を受けていた芥川である。しかし、〈切実な実際問題〉に行き詰った時、短歌の形式の限界を感じ、古典詩形を経て、

次の「詩」を模索したと言えないだろうか。

片山廣子は「心の花」の歌人であり、アイルランド文学の翻訳家「松村みね子」としても活躍した。母校の東洋英和女学院には、多くの蔵書が寄贈されている。その中に、芥川から贈呈された『羅生門』があり、「おひまの節およみ下さい」と書いた名刺が挿まれている。同じく英文学を学び、〈才力の上でも格闘出来る女〉と敬慕し、交流が続いてゆく女性である。片山廣子の第一歌集『翡翠』は、竹柏会出版部・東京堂より、大正五年三月に出版された。芥川は『翡翠』の紹介文を「新思潮」に寄せている。廣子は芥川より十四歳年上。父は外交官、夫の貞次郎は日本銀行調査役であり、二児の母親でもあった。

片山廣子歌集『翡翠』評　大正五年六月「新思潮」

翡翠　片山廣子氏著　芥川龍之介

この作者は、序で佐々木信綱氏も云つてゐる様に在來の境地を離れて、一歩を新しい路に投じ様としてゐる。「曼珠沙華肩にかつぎて白狐たち黄なる夕日にさざめきをどる」と云ふ様な歌が、其過去を代表するものとするならば、「何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり」と云ふ様な歌は、其未來を暗示するものであらう。勿論、後者の様な歌に於ては、表現の形式内容二つながら、この作者は、まだ幼稚である。しかし易きを去つて難きに就いたと云ふ事は、少くとも作者自身にとって、意味のある事に相違ない。そして同時に又この歌集が、他の心の花叢書と撰を異にする所以は、此處に存するのではないかと思ふ。左に二三、すぐれてゐると思ふ歌を擧げて、紹介の責を完する事にしやう。

灌木の枯れたる枝もうすあかう青木に交り霜とけにけり

日の光る木の間にやすむ小雀ら木の葉うごけば尾をふりてゐる

沈丁花さきつづきたる石だたみ靜にふみて戸の前に立つ

それから母としての胸懐を歌つた歌に、眞率な愛す可きものが、二三ある。

たゆたはずのぞみ抱きて若き日をのびよと思ふわが幼兒よ

我をしも親とよぶびと二人あり斯く思ふ時こころをさまる

野口米次郎氏の序も、内容に適切である。装幀は清洒としてゐる。

（啞苦陀）

〈何となく眺むる春の生垣を鳥とび立ちぬ野に飛びにけり〉深窓に育った令嬢で、外国の文化教養も身に付け、〈わがゆめに折々みえし白鳥の羽音す春のほのぐらき朝〉広やかな世界に意志を持って飛び立ちたいと願っている。そういう自分も知らない自分がいるのではないか。〈さびしらに浅間葡萄も吸ひて見む人酔はしむる毒ありといふ〉「クチナシ婦人」と言われた無口な廣子が堪えているものに、芥川が気付かないはずはない。近代女性の新しい生き方と、旧時代の女性の価値観との葛藤を詠む心象詠に、廣子らしさがある。芥川は、「我をしも」の歌の他は気品ある叙景歌を挙げ、廣子への止めた想いの前兆を感じさせる。

「在來の境地を離れて、一歩を新しい路に投じ様としてゐる」「易きを去つて難きに就いた」という点は、〈いぶかしみ世は我を見るわたつみの底より来つる少女の如く〉の歌を挙げられる。「我を生きよう」とするゆえの、廣子の生きづらさと覚悟が読み取れる。「吾がひとりゆく」覚悟である芥川は、自分の進む方向に重ねていると読める。この歌集が「他の心の花叢書と撰を異にする」と指摘する点は、芥川の勘が鋭く、廣子は翻訳家としての活躍はするが、歌がマンネリになるのを危惧し、第二歌集『野に住みて』は昭和二九年、七六歳になってからであった。二人の交流は、芥川の旋頭歌「越びと」や、堀辰雄の小説「聖家族」「ルウベンスの偽画」「物語の女」に描かれた。

三、齊藤茂吉との出会い（大正六年から大正八年）

大正六年は第一短編集『羅生門』を刊行。「或日の大石内蔵助」「戯作三昧」等を発表。大正七年、塚本文子と結婚。「蜘蛛の糸」「地獄変」「枯野抄」を発表。

安森敏隆『近代短歌を学ぶ人のために』（四八頁）[5]にて、大正期の歌壇について確認しておきたい。

大正期十五年は短歌雑誌全盛の時代である。明治四十五年間に比して三倍にも上ると言われている。尾上柴舟に師事した石井直三郎の「水甕」（大3・4）、窪田空穂の「国民文学」（大3・6）、太田水穂の「潮音」（明44・7）と続き、これを大正直前までに広げると、牧水の「創作」（明43・3）前田夕暮の「詩歌」（明44・4）など目白押しの状況が生まれている。こうした中で大正に入って、明治から継続してきた佐佐木信綱の「心の花」や、伊藤左千夫の死（大2・7）の後、主導権を握った島木赤彦、斎藤茂吉らの「アララギ」が会員組織を確立して、短歌結社の地盤を拡大した。

大正八年、大阪毎日新聞社社員となり田端に戻る。旅先で斎藤茂吉に初めて会う。『赤光』との出会いは、大正二年秋、帝国大学入学時。その影響は長く続いていく。大正期、短歌は隆盛期を迎えていた。中心の一つが、安森氏が述べるように、「アララギ」の短歌結社による地盤の拡大と短歌雑誌の拡充であった。

奥野政元は『芥川龍之介論』（九七頁）で、芥川の短歌の変化が明らかであると指摘する。

うつゝなきまひるのうみはすなのむた雲母のごとくまばゆくもあるか

八百日ゆく遠の渚は銀泥の水ぬるませて日にかゞやくもきらゝかにこゝだ身動くいさゝ波砂に消なむとするいさゝ波

いゝさ波生れも出でねと高天ゆ光はちゞにふれり光は

大正四年二月『未来』に発表された「砂上遅日」の、これら連作歌を挙げ、「それまでの白秋的情調とは異なり、明確に茂吉の影響が指摘できるものである。」と述べている。それは、斎藤茂吉から影響を受けた、写実手法の象徴的な生命讃歌であった。芥川の「僻見」の文章には、斎藤茂吉への讃辞が綴られている。

僻見　（斎藤茂吉）

僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になつたのでもない。斎藤茂吉にあけて貰つたのである。（略）あらゆる文芸上の形式美に対する眼をあける手伝ひもしてくれたのである。（略）あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり（略）ゴツホの太陽は幾たびか日本の画家のカンヴアスを照らした。しかし「一本の道」ほど、沈痛なる風景を照らしたことは必しも度たびはなかつたであらう。（略）近代の日本の文芸は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした独自の表現に志してゐる。茂吉はこの竪横の両面を最高度に具へた歌人である。

茂吉とは、短歌ばかりでなく、晩年まで精神科の医師と患者としても付き合いが続くことになる。

大正六年

ひえびえとふく春風も夜（よる）さればわが幼妻（をさなづま）さはりあるなよ

亂抄（歌稿より）

ほのかなるひと花茄子（なすび）かぎよりて人は遠しと思ひけるかも

大正六、七年頃

ぬば玉の夜鳥啼きゐる山むかひもろらに朱の月落ちんとす

行く春の山の岩間に水は垂り岩根を見れば苔青む見ゆ
山ふかみ夕づく峡ゆひえびえと天のまほらは朱らひく見ゆ

「ほのかなる」の一首は、茂吉が写実とはもののみでなく、心も入れる表現をと唱えた「実相観入」の考えに合致する。「ぬば玉の」「行く春の」「山ふかみ」赤と青が交互に使われる。赤は滅びゆくもの、「赤光」を連想させる。青は誕生であろうか。白秋の感覚的な鋭さと、青年期への幽かな郷愁が感じられる。

四、中国特派員体験と今様体（大正九年から十年）

大正九年、長男の比呂志が誕生した。二八歳の父である。「秋」「南京の基督」「杜子春」。大正十年三月、大阪毎日新聞の特派員として中国へ旅立つ。上海から蘇州、南京、洛陽、北京、朝鮮を経て七月末に日本に戻った。旅行中から病に苦しむ。中国は幼い頃から親しんだ漢詩文の、古典の中の世界とは大きな隔たりがあった。改めて、滅びようとする古典のフォーム（型）に惹かれてゆく。「越びと」へと続く一連の作品は、その一つではなかっただろうか。「往生絵巻」「上海游記」を発表。

大正九年

押し照れる月夜静けみ動かざる簾の上に馬蠅一つ　七・八　齋藤茂吉宛書簡

赤らひく肌ふりつゝ河童らはほのぼのとして眠りたるかも　九・二二　小穴隆一

この川の愛し河童は人間をまぐとせしかば殺されにけり

短夜の清き川瀬に河童われは人を愛しとひた泣きにけり

大正十年

たそがれはかなしきものかはろばろと夷の市にわれは來にけり　七・十一　松本鎗吉

支那服を着つつねりにし花合歓の下かげ大路思ふにたへめや

自轉車にまたがる男ペダルふまずまむかに坂をひた下し來る　十一・十　佐々木茂索

「短夜の」河童は自分自身だと言う。愛し、さびしと泣くのである。河童は〈童〉である。幼子のように無防備であるために、深く傷ついた者の比喩のように読める。「まむかに坂をひた下し來る自轉車の男」は、強迫観念に感じられる。神経衰弱が進みつつあった。「ペダルふまずまむかに坂をひた下し來」たのは、芥川自身だったと、「切実な覚悟」をも

って生きた、その境涯を重ねて読めないこともない。

「秋」は、中国旅行の前年、大正九年に書かれている。

山崎甲一「秋」―彼等三人の内面のドラマ―（『アプローチ　芥川龍之介』）（一一二、一一四頁）[6]

こうして、この「秋」〈大正9年〉という「作品」は、「彼等三人の」「心の中」に隠された、緊張した葛藤（ドラマ）を生き生きと写し出していた。「仲の好い」三人の「心の内」側に秘められた「生臭」い「間がら」というものを、簡潔で含みの多い、暗示的、象徴的な文体を通して、立体的に浮かび上らせることに成功している。

（中略）

曇天や蝮生き居る罎の中／曇天の水動かずよ芹の中

というような句をこの「秋」という作品にちなんで作っている（大正9年3月31日、瀧田哲太郎宛）。自分の「恥じ入りた」くなる「暮しの奥底」である「蝮」の「生」態を、見据えて「動」こうとはしないこの作者の切実な覚悟というようなものが窺われる。

ここで述べられる「簡潔で含みの多い、暗示的、象徴的な文体」は、数多くの小説を世に問う繁忙な日々の中で、詩歌を作り続けることにより鍛え上げられたと言える。西洋を常に意識しながらも、日本的詩歌を求める。一方、嘗て真向かうことで雄飛した「切実な覚悟」が、休むことなく自らを追い詰めてゆく。

大正十年、中国旅行は新しい創作へと向かう覚悟の旅であった。「たそがれはかなしきものかはろばろと」来た異国の地は、旅情を感じるばかりではなかった。現実の猥雑な中国に、嫌悪感を覚える面もあった。帰国後、滅びゆくものを愛おしむように、今様など古典的な韻律に惹かれてゆく。

笠井秋生『芥川龍之介作品研究』[7]

中国旅行（大10・3～7）中の作で、与謝野寛、晶子宛の絵葉書（大10・5・30）にこの詩（しらべかなしき蛇皮線に／小翠花は歌ひけり／耳環は金にゆらげども／君に似ざるを如何にせん）を記し、（「コレハ新体今様デアリマス」と書き添えている。）（略）今様体四行詩は、大正十年になって芥川が初めて試みた詩形だと言ってよかろう。佐藤春夫の『殉情詩集』（大10・7）の影響があるかもしれない。（二五一・二五二頁）

佐藤春夫宛書簡（大14・9・25）の中にも芥川は、〈どうも日本の詩人は聾だね。（歌人は例外）少くも視覚的効果に鋭い割に聴覚的効果に鈍感だね。君はさう思はぬか？　長歌、催馬楽、今様などのリズムもどうも

もう一度考え直して見る必要がありさうだ〉と書いて（二六〇頁）

平岡敏夫「芥川龍之介と萩原朔太郎」『芥川龍之介と現代』（三四二頁）

『月に吠える』の「竹とその哀傷」の中でも秀作として知られる　「天上縊死」だが、七五の六句で今様体を生かしている。（中略）この今様体を積極的に生かして、すぐれた詩を芥川が残していることは朔太郎とともにもっと記憶されねばならないだろう。次にあげる「相聞」の二詩はむろん典型的な今様体である。

相聞二／風にまひたるすげ笠の／なにかは路に落ちざらん。／わが名はいかで惜しむべき。／惜しむは君が名のみとよ。

相聞三／また立ちかえる水無月の歎きを誰にかたるべき。／沙羅のみづ枝に花さけば、かなしき人の目ぞ見ゆる。

笠井氏と平岡氏は、今様など古典的な韻律を、詩人たちとの交流の中で修練し、我が物としていることを指摘している。漢詩文に造詣が深い芥川は、中国旅行から帰り、改めて古典的韻律に惹かれていったと言えるであろう。「相聞」の二詩は、旋頭歌「越びと」へと繋がり、「君」は、片山廣子である。

五、大正歌壇と、『橄欖』における芥川の短歌と批評（大正十一年から十二年）

大正十一年、健康が悪化していく。神経衰弱、腸カタルなど。七月、森鷗外死去。「藪の中」「将軍」「トロッコ」「六の宮の姫君」を発表。大正十二年、「侏儒の言葉」、六月、衝撃的な有島武郎の情死を知る。九月、関東大震災。自宅は焼失を免れた。十月、堀辰雄と出会う。

大正十一年

書簡

明星に觀潮樓主人の奈良五十首が出てゐるのを讀みましたか五十首とも大抵まづいですね（以下略）（一月一三日）

原稿を書かねばならぬ苦しさに痩すらむ我をあはれと思へ（二月一五日）

神経衰弱癒えずぬば玉のみ見つつ安いせずわれは（二月推定）

森さんの歌は下手ですね　僕の方がうまいでせう　すなはち／秋ふくる書ほのぼのと朝顔は花ひらき居り呉竹のうらに／　御一笑下さい（一二月二九日）

大正十二年

書簡

キミモ亦婦人公論ノ女記者波多野秋子ヲ知リタマフラン（三月五日）

遠つ峯にかがよふ雪の幽かにも命を守ると君につげなむ／秋たくる庭たかむらに置く霜の音の幽けさを君知らざらむ（室生犀星宛一二月一六日）

「キミモ亦」の歌で、芥川が興味を持った波多野秋子は、この年六月に有島武郎と情死をする。二人ともに知る間柄だけに、ショックは大きかったことであろう。室生犀星宛の二首、幽玄・幽妙の世界に心惹かれるとともに、天然の力に縋ろうとしているように感じられる。

大正十一年の「六の宮の姫君」について、菊地弘『芥川龍之介―表現と存在』（八九頁）[9]では、和歌が採り上げられている。

姫君を探して洛中を歩きまわる男は、何日か後の夕暮れ、むら雨を避け朱雀門の前にある〈西の曲殿の軒下に立つた。〉そこには物乞いらしい法師一人も雨止みを待ちわびていた。男は檻子の中に人のけはいを感じ覗くと、破れた筵に、病人らしい女と、女を介抱している尼を見、男は一目で姫君と見てとった。

「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」の歌の声を聞き、男は姫君の名を呼び、姫君も身を起こすが、男を見るや〈何かかすかに叫んだきり〉息が絶え絶えになっていったとある。この歌は拾遺集巻十四、恋四によみ人しらずとある和歌であるが、姫君の場合は、〈「なりゆきに任せる外はない」〉という、宿命の生に生きた姫君の感慨を表している。

作品の中に和歌を挿入している。それも重要な役目である。「さむしろに衣かたしき今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫」（古今・恋四・よみ人しらず）『源氏物語』ゆかりのこの歌のイメージが重なる。菊地氏は、「なりゆきに任せる外はない」と宿命に生きた姫君だとしている。これに対し、芥川龍之介は創作者としての「切実な覚悟」を持って、宿命に挑まかわんとした人と言えるのではないか。

この度、吉植庄亮研究家の飯田洋氏より、『橄欖』春季特別號（大正十二年二月一日発行）をお借りすることができた。芥川の短歌十首と吉植庄亮宛の書簡が掲載されている。

『橄欖』は歌人であり、政治家でもあり、印旛沼の開墾に尽力した吉植庄亮が大正十一年に創刊した歌誌である。大正十年に第一歌集『寂光』を出し、芥川にも贈呈した。中国

旅行中だった芥川は、書簡に返礼の遅れを詫びて、庄亮の短歌への讃辞を送っている。二人は一高・東大の同窓であり、吉植が七歳年上だが留年をして卒業は一緒であった。

芥川の短歌が載った隣頁には、前田夕暮の短歌九首が載る。二人の短歌を読み比べてみよう。

『橄欖』春季特別號　大正十二年二月一日発行
吉植庄亮編集　東京橄欖発行所

時折の歌　芥川龍之介

柿の落葉

露霜の朝、ふれば甘柿は葉をおとしたり柿澁はまだ
このゆふべ風呂に焚かんと裏庭の柿の落葉を掃きをる我は
土にしける柿の落葉は露霜に濡れたるならん掃けどもとれず

佐藤惣之助君、琉球諸島風物詩集を呉れる、すなはちお禮の手紙に。

空にみつ大和扇をかざしつ、來よとつげけんミヤラビあはれ
（註に曰。ミヤラビは娘子の琉球語なり）
しぐれ
この朝げしぐれの雨のふりしかば濡れしづまりぬ庭土の荒れ
わが庭はかれ山吹の青枝のむら立つなべにぐ(ママ)しれふるなり
ひさかたのしぐれを寒み口もきかず炬燵にこもる與茂平とわれは

寒木堂所蔵の書簡を觀る。

葉をこぞり風になびける墨の竹誰か描きけんこの墨の竹
筆太の題詩をながみうす墨の墨繪の花は傾きてをり

小穴隆一君と別る。

ぬば玉の夜風に春は冴ゆるころを一游亭よ風ひくなゆめ
（百十頁）

索道

『山林稼行の歌より』(ママ)　前田夕暮

奥秩父群馬の國境に秩父鑛山あり、（以下略）

枯草にねてゐる吾の上の空索道の線の太く横切る
國境の彼の鑛山からつきづきにはこばれて來るバケットの搖れ
更らに一つ我が上を行くバケットのなかに人ゐて吾を呼べるも

いねながら大きな聲でこたへたりバケットのなかの人に
むかひて
みるみるバケットは遠かざりみるみる人ははるかに小さ
し
その人のぽつちりと小さくなりし頃手を高くあげて呼ば
はりにけり
はろばろと秩父の奥の鑛山から索道にはこばれてくる人
のなつかしさよ
吾も亦かのバケットにはこばれて曠野よぎらんと切に思
へり

×

山より野へ野よりはろけき村追えて行きたる人を思ふ夜
床に　（百十一頁）

龍之介の「柿の落葉」の歌三首は本所の旧居を偲んで詠み、アララギ的な写実というよりも報告調で、渋みというよりは平凡である。だが、〈この朝げしぐれの雨のふりしかば濡れしづまりぬ庭土の荒れ　〉の歌は、なにか荒んだ作者の心情まで踏み込んだ深みを持つ。この頃、芥川は養家ばかりでなく実家の面倒をもみる負担が増え、病気に加えて女性問題、金銭問題、出版を巡るトラブルと、心休まる暇がなかった。

夕暮の〈枯草にねてゐる吾の上の空索道の線の太く横切る〉は、印象派の絵画のように鮮やかである。〈その人のぽつちりと小さくなりし頃手を高くあげて呼ばはりにけり〉には、奥秩父で山林事業に打ち込み、歌壇で沈黙を続け、贅肉を削ぎ落とした爽快ささえ感じる。自然と労働が日常として詠まれている。

山田吉郎『前田夕暮の文学』「明治記念総合歌会講演集」（四頁）[10]には、この時期の解説がある。

［第五期］奥秩父隠退の時代。大正七年（三十六歳）～大正十一年（四十歳）。『詩歌』廃刊後、奥秩父での山林事業に打ち込み、歌壇的には沈黙をつづけた。

［第六期］天然更新から『日光』を経て『詩歌』復刊に至る時代。大正十二年（四十一歳）～昭和四年（四十七歳）。奥秩父隠退の沈黙を破って発表された「天然更新の歌」、北原白秋との出会いによって堰が切られた『日光』誌上の華々しい活躍、『詩歌』の復活等、中期前田夕暮の鮮烈な軌跡が見られる。（略）

山田吉郎『前田夕暮研究―受容と創造―』（二二六頁）[11]

第一に「大正十年代のアララギ派に対する反対勢力としての意味を担ったこと」「ともに島木赤彦らと論争をなし、また口語運動という具体的な作歌の中で、アララ

ギ派への批判をつよめていったのである。」第二に「夕暮が白秋に影響を与える形で」「うちつけに物をいふ形式」で「基本的労働を扱った口語歌が詠まれた」第三に「強固な結社制度の支配する歌壇のあり方に大きな反省を促し」「やがて白樺風の同人誌をめざしたという『日光』（吉植庄亮も参加して）の創刊へとつながってゆくのである。」

山田氏の述べる、前田夕暮と北原白秋の交流に、大正歌壇が実に大きなエネルギーを持っていたことが分かる。この中で芥川龍之介は、『橄欖』での前田夕暮の短歌に、印象派のゴッホの影響を、斎藤茂吉の『赤光』と出会った時のような衝撃を見出したのではないだろうか。大正三年の書簡で「日をうけてどんどん空の方へのびてゆく草のやうな生活力の溢れてゐる芸術」を賞揚している。しかし大正十二年、神経衰弱の進む彼には、「生活力」というのではなく、夕暮の自然体で伸びやかな歌に惹かれたのであろう。

来嶋靖生は『大正歌壇史私稿』（一九二頁）[12]に述べる。

これより先、大正七年に「詩歌」を廃刊し、久しく沈黙していた前田夕暮が二月に「天然更新の歌」八十七首を「短歌雑誌」に発表し、同時に「自己宣言」という文章も添え、華々しく復帰した。翌月さらに同じ「短歌雑誌」に六十四首を「水源地帯」の題で発表、以後白秋と親密となり競詠などを試みている。内容は奥秩父山林に働く人々の姿や自然を素材としているが、その根底に後期印象派、とくにゴッホの影響や社会主義への関心、「アララギ」への反感などがあったとみられているが、この勢いがそのまま「日光」創刊へと繋がって行く。

水源地帯（抄）　前田夕暮

急傾斜の山の草の上にいねたればからだ一二尺ずりさがりけり

太陽を見失ひたる空のはて同じやうな山が同じやうに立ち

朝はまだつめたき山の五月なり朴の丸太のうす青みたる

（「短歌雑誌」12年3月号）

ここで採り上げてある「急傾斜」の一首には、軽みやユーモアがある。「同じやうな山が同じやうに立ち」は、現代短歌の表現としても少しも古さを感じさせない。

次は、同じ『橄欖』に掲載された芥川から吉植庄亮へ送られた書簡である。

拝啓

高著いただきありがたく存じます。いただいたのが支

那旅行中だった為、大變御禮がおくれました『寂光』を拝見してちと驚きました。あなたがこれ程うまい歌の持ち主だとは失禮ながら、今日まで考へなかった為であります。どの歌も、あなたが春草會などで作る歌より、ずつとうまい。殊に大原行の最初の一首なぞは、甚だ堂々としてゐます。それから歌では、無論この頃の歌の方が、昔の歌よりも、御手際が上です。しかし大正四五年の歌には何か鋭い所が、何か調子の張つた所が、感じられるやうな氣がします。この批評はあなたに愉快か不愉快か知りませんが、次手ながらつけ加えます。取りあへず御禮まで。

芥川龍三郎

二伸、その後僕は歌は全然不勉強です。心田荒涼自ら憐んでゐます。さ庭べの草煙り居る薄暑かな

（二一頁）

吉植庄亮「寂光」『吉植庄亮全歌集』[13]で確認をした。

大原行（全十六首）　途上

ねもごろに見ればみ山の傾斜（なぞへ）ありゆき向ふ空のふかき霞に

いやふかき久方の空の冬霞見つめて居れば山らしき見ゆ

ゆき向ふ大原あたりは冥（くら）きまで今朝冬霞たちこめにけり

哀語　（大正五年・大正四年）

食扶持（くひぶち）をもらふよりほかに用のなき父の尊（みこと）となりましにけり

電線にとまる燕も親子等はひとかたまりにあつまるあはれ

独りねのわが母刀自にしらしらと誰が植ゑにけむ鬢の白髪は

推せばぴいと泣く人形の心かも反逆心に子はなりにけり

崩れむとする塔よりも危ふかる胸一ぱいのわが身なりけり

『寂光』は、十年の沈黙の後に刊行した復活の歌集である。「堂々として」いると称賛している「大原行の最初の一首」は、〈ねもごろに見ればみ山の傾斜ありゆき向ふ空のふかき霞に〉。霞が途切れた一瞬に山の傾斜が見えた、甚だ幽玄繊細の一首である。どこから空で山かもわからぬ、芥川はそこ

に天然の力と自然の厳かさを感じ取っている。野性美を感じとっているのではない。象徴的な詠みぶりである。

「鋭い所」「調子の張った所」という、大正五・四年の歌は、政治家・経営者で別の女性と暮らす父親との確執と、母への同情から、庄亮が過ごした放浪無頼の青年時代を詠んだものである。〈か、れとては、その母は生みにけむかなしみにのみわが生くるなり〉と、狂人となって早くに亡くなった母を詠んでいる芥川は、我が境涯を重ねたのかもしれない。「芥川龍三郎」とは、庄亮の歌に敬意を払ってのものであろうか。「心田」は心を田地にたとえ、心が荒れすさんでいるから良い短歌が詠めないのだと言っている。実際に、この後から歌数は減ってきている。この書簡は、岩波版新全集第十九巻書簡Ⅲ所収である。大正十年八月の書簡と推定されている。（龍之介に改）

六、うたのゆくえ

芥川は、理知的分析的な資質を持つ一方で、抒情性と磨きつくされた珠玉の言葉が多くの作品のかけがえのない魅力となっている。短歌の批評の方面では、文壇での活動の場を広げてゆく。

芥川の短歌は、白秋の模倣に始まった。吉田弥生との失恋の葛藤と向き合い、茂吉の「生命の発現」を詠む歌に復活する。身を削るような作家活動の中、短歌は心の吐露や癒しの役目を果たす。抒情性の涵養と言語表現の修練となり、形式と韻律の追求を続けた。短歌が小説に大きな影響を与えたとは言えないだろうが、発狂した母を持つ哀しさを癒し、作家芥川龍之介の人生に寄り添ったのではないだろうか。

ここまでの芥川の短歌を読んでくると、憧れた白秋の新境地の幽玄体（象徴主義）に近いものがある。また、前田夕暮は奥秩父で山林事業に打ち込んだ後、歌壇に復帰して近代主義（新自由律短歌）へ進んでゆく。後に印旛沼の開墾に尽力した吉植庄亮は、十年の沈黙を経て歌集『寂光』を出す。彼らに見出したのは、天然自然に何ものにも捉われない、願わくば再生であっただろう。しかし、芥川のとっての天然である「大川の水」は、あまりにも柵となり淀んでいた。「在來の境地を離れて、一歩を新しい路に投じ様としてゐる」「易きを去つて難きに就いた」と片山廣子の歌集に自分を重ねたように、新しい困難な道を探し続ける。芥川はどこにも与しないが、歌人たちとの交流の中で様々な出会いをし、鍛錬されてゆく。

そして、〈光は西からだけでなく、過去からも来る〉（「文藝的な、餘りに文藝的な」）と、古典的な旋頭歌の形式の「越びと」が『明星』に発表されたのは、大正十四年三月のことになる。この後の短歌作品は、数も少なく心身の衰弱を

感じさせる内容である。一方で、昭和二年の谷崎潤一郎との「小説論争」に、芥川は「詩的精神」を掲げて主張を続ける。ありのままに、天然自然の囚われぬものから生まれるのが「詩的精神」ではなかっただろうか。芥川にとって短歌を詠まなくなった、あるいは詠めなくなったのが「うたのわかれ」とするならば、芥川が新たに求めようとしていた「うたのゆくえ」としての「現代詩」を、考察する必要があると考えるものである。

注

(1) 佐佐木幸綱「詩歌」菊地弘他編『芥川龍之介研究』(明治書院　一九八一年八月)
(2) 奥野政元『芥川龍之介論』(翰林書房一九九三年九月)
(3) 関口安義『芥川龍之介の歴史認識』(新日本出版二〇〇四年十月)
(4) 山崎甲一『芥川龍之介の言語空間』—君看雙眼色(笠間書院一九九九年三月)
(5) 安森敏隆『近代短歌を学ぶ人のために』(世界思想社　一九九八年五月)
(6) 山崎甲一「秋」—彼等三人の内面のドラマ—関口安義編『アプローチ　芥川龍之介』(明治書院　一九九二年五月)
(7) 笠井秋生『芥川龍之介作品研究』(双文社　一九九三年五月)
(8) 平岡敏夫「芥川龍之介と萩原朔太郎」『芥川龍之介と現代』(大修館　一九九五年七月)
(9) 菊地弘『芥川龍之介—表現と存在』(明治書院　一九九四年一月)
(10) 山田吉郎『前田夕暮の文学』夢工房転載「明治記念総合歌会講演集」二〇〇五
(11) 山田吉郎『前田夕暮研究—受容と創造—』(風間書房　二〇〇一年六月)
(12) 来嶋靖生『大正歌壇史私稿』(ゆまに書房　二〇〇八年四月)
(13) 吉植庄亮「寂光」『吉植庄亮全歌集』(橄欖社　一九七〇年九月)

【作品引用】

『片山廣子全歌集』秋谷美保子編(現代短歌社　二〇一二年四月)
『橄欖』春季特別號　吉植庄亮編集(東京橄欖発行所　一九二三年二月)
『芥川龍之介全集』　第六巻　第九巻　第十巻　第十一巻(岩波書店　一九七八年四月)
葛巻義敏『芥川龍之介未定稿集』(岩波書店　一九六八年二月)